Battle Santa

光臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｂａｔｔｌｅ　Ｓａｎｔａ

【Ｎコード】

Ｎ６０６８Ｚ

【作者名】

光臣

【あらすじ】

サンタクロースが主人公のファンタジー物です。笑い少々、シリアス少々、ＲＰＧ要素少々に多少香辛料が加わった感じで仕上げていきたいと思います。

前書き的なやつ（前書き）

小説初挑戦です。

誤字脱字、駄文になるかと思いますが

生暖かく見守ってくださいませ。

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

前書き的なやつ

今年も時期が来た。

1年に一度、子供達が夢を叶える日。

そして、家族、恋人、様々な人間が愛情を深める日。

逆に去っていく日…。

まだ無知な子供達は

「きっと自分の所にもサンタさんがやってきて、プレゼントを届けてくれる」

そんな夢を抱き、当日を迎える。

徐々に大人になっていくに連れてそんな夢も消え失せ

「サンタなんていない。寝たふりをしていたら父親がプレゼントをくれた…」

そんな現実を突き付けられ、少しづつ大人へと近づいていく…。

しかし

「良い子にしていたらきっとサンタさんがきてくれる」

いつまでもサンタの存在を信じている純粋な子供達の所へ

『サンタ』は必ず現れるのだ。

それは父親でも母親でもなく、恋人でもない

紛れもないサンタクロース。

老若男女問わず、夢を叶えてくれる魔法使い。

今年もきっと彼は現れる、人々の夢を叶える為に…。

サンタ

ここは一年中、雪が降りしきる極寒の大地。
腕に覚えがある冒険家はおろか、強靭な肉体を持つ戦士ですら
足を踏み入れないほぼ未開拓の土地。
ほぼ北極圏に近いため、動植物の活動もほぼ見られない。
その寒さと過酷な環境に適合できる生物は海洋生物くらいである。

そんな誰も足を踏み入れない秘境とも呼ばれる大地で暮らす
風変わりな種族がいた。

外見上は人間と変わらないが
一切の食事の類は摂らず、空気と水だけで何百年も生き抜けるのだ。
そんな異常な発達をした彼らだが
一年に一度。

必ず故郷を離れ、彼らなりの『食事』に出かける事がある。
その食事を行わなければ、次の食事の時期までには死んでしまうという
これまた変わった種族なのである。

食事と言えば
通常は何らかの食品、あるいはそれを調理してできた料理を食べる形が一般的である。
しかし、彼らの食事とは
『人々の夢や希望などの正の心を摂取する事』である。
食事をする為に、彼らは人の心を読み
その者の欲する物品を入手、または作成、望む事を極力叶える。
対価として対象の満たされた心を食するのだ。

正の心を食すれば、摂取した側も善良な心の持ち主になり
また来年も同じように、食事をする為に一仕事する。

これがX，ｍａｓという

彼らが一年に一度、外界へ唯一出かける事が出来る日。

人々がサンタと呼ぶ種族なのである。

ヒゲ親父だけがサンタとは限らない

この世界のサンタの総人口は
意外に少ないと思われがちなのだが、実はかなりの数が存在する。
人間、亜人、エルフといった夢や希望を持つ
高度な生物の人口を合計し、６０億とするならばその半数の３０億はいる。

食事の対象はなにも人間だけとは限らず、
植物やモンスターといった言葉を持たぬ者からでも摂取する事が可能な為
新たな生物が生まれると同時に
サンタの人口も比例して増える。
生殖活動や、分裂の類ではなく
前触れなく出現、むしろ発生に近い形でサンタは生まれるのだ。

世界の種族でも1．2位を争うほどの総人口の多さから
もちろん食事の競争率も高い。
毎年、満足な食事を行う事ができずに絶命してしまうサンタも少なくないのだ。

若いサンタほど仕事の経験が少ない為、要領を得られないので
激しい競争に負け、次々に命を落とす。
逆に高齢になったサンタはその分、何度も何度も仕事の経験をしている為
若いサンタよりも食事の成功率が高い。

故に、人々が運良く見かける事が出来たという
赤い服を着たヒゲっ面の爺のような姿のサンタは
間違いなくベテランのサンタであり
その目撃例も多い事から
サンタ＝ヒゲ爺という固定概念が生まれたのだ。

競争により対立、それからの戦争

食事を摂れば摂るほど彼らは仕事を覚えるのは当然だが

それ以上に、彼ら特有の『魔法』と呼ばれる技術も飛躍的に上昇する。

食事の質が良ければ良いほど、魔法技術の質も上がり

食事競争に勝てる確立も上がるのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法例‥

アラーム‥　鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、
　　　　　食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サーチ‥　住居などに侵入可能な出入口がない場合、
　　　　壁や天井などをすり抜ける事ができる。

スルー‥　気配を殺し、限りなく目視不可能なレベルにまで
　　　　体を透過させる事が出来る。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

食事を争い、抗争や対立するサンタも少なくない。

小さな抗争から発展し
大規模な戦争が巻き起こる場合もあるのだ。

生き残る為とは言え、過酷な生存競争を日夜強いられているサンタだが
世界の総人口は毎日約２０万という単位で増え続けている為
比例し、人口を増やし続けるサンタの人口も減る事はないようだ。

近年、サンタの中でも
『正の心』は競争率が高い為、あえて『負の心』を食すサンタが急増し
赤い正装ではなく、全身真っ黒の衣装を纏った
通称『ブラックサンタ』が急増し始めたのだ。

彼らは、『負の心』を栄養としている為か、非常に好戦的であり
腹黒く、邪悪な魔法を使う。

純粋な『正の心』は非常に希少価値が高いのだが
『負の心』は今までサンタは手を出さなかった為か
純粋で尚且つ凶悪な心を手に入れるのは容易い事もあり、
質が良ければ魔法の質も上がるという特徴から
ブラックサンタ勢が優勢なのは言うまでもない。

現在、サンタの世界では
『正の心』を重んじる派閥『サンタクロース』と
『負の心』を重んじる派閥『ブラックサンタ』が対立を起こし
交戦状態が続いているのだ。

外界に赴く前に必ず一度は大規模な勢力戦が繰り広げられる。
その日は食事の日の前日。
『イブ』と呼ばれるサンタ達にとっては最悪な日なのである。

競争により対立、それからの戦争（後書き）

世界観が長ったらくて申し訳ございません。

次からは本編に移ります（汗）

名前を持たないサンタ

自然発生すると言っても過言ではないサンタの生態は
彼らに血の繋がりや家族と言った概念を持たせない。
生まれた時から一人で生き抜く最低限の力と知恵を持っているのだ。
しかし、いくら故郷で生活するとは言え
一人の力ではなんともならない場合もある。
最悪な場合、
生まれた瞬間に好戦的なサンタから攻撃を受け
消滅してしまうケースも少なくはない。
まさに運も生き残るには必要不可欠な能力なのである。

幸いな事に良心的なサンタの集落の傍で生まれた者は
なんとか食事の時期までは生き残る事を約束されるのだが
それぞれの集落では、やはり生き抜くために

厳しい掟が存在するようである。

今日もまた

サンタが住む大地、『アークチック』に新たなサンタが発生した…

生まれたときから赤い服を纏い

赤い帽子を被り

赤いブーツを履いている姿。

最近は輪廻の関係で

生まれた時から全身真っ黒の衣装に包んだサンタも発生するらしいが…

このサンタは赤。

つまり、発生した時点では

『正の心』を栄養にする『サンタクロース』に該当する派閥である。
サンタ達には交配や生殖機能は存在しないのだが、性別はある。
食事を摂る場合、大抵は男か女かで対象が2種の性別を持つ為
それに合わせてサンタも性別を分けたのだと思われる。

遠慮という言葉を知らない豪雪。
吹雪の中に赤が目立つ。
次に特徴的なのは腰ほどまである長い髪。
全体的に露出度が高い衣装。
傍から見れば物凄く寒そうに見えるが、
寒さに対する耐性は生まれつき非常に高い。
ぱっと見ただけでこのサンタは『女』である事がわかる。

初めてみる景色、吹雪にも全く動じず
平然とどこへ向かうか模索しているようである。
親という者はサンタの世界に存在するはずもなく
自分の名前はおろか、自分の家族や仲間も知らず
ただわかるのは、己の目的のみ。

（まずなにをすればいいのか…）

彼女はやや途方にくれたような顔で
あたりを見渡している。
生まれた瞬間から孤独という耐え難い試練を受ける
一人でも生き抜く力を
己で身につけなければならないサンタならではの苦行であった。

世の中運があればなんとかなると思う

吐いた息に含まれる水分も一瞬で凍りつき
まるで宝石の様にキラキラと光沢を帯びる。
辺り一面真っ白な白銀の世界。
太陽の光は、空を覆う厚い雲の隙間から差し込みはしているものの
積雪に反射し、より一層白さを強調する。

方位磁石などもってはいない彼女は方向感覚も麻痺し
一応、まっすぐ進んでいるようではあるが
実は同じ場所をぐるぐる回っているのではないかと思われる。
もし、彼女がサンタでなければ
この全てを凍りつかすような寒さと
真横から、真上から、あらゆる方向から吹き付ける吹雪に耐え切れず
確実に遭難、もしくは命を落としているであろう。

進む方角も安定しない、かと言って動かなければなにも始まらない。
彼女の生存本能は自然と足を前に運ぶ。
だが、些細な振動や気温の変化で雪崩が起き易い山の傍は避け
偶然発見した木の棒で前方を確認しながらの歩き方。
さすがはサンタといったところである。
生まれて早々、雪崩やクレバスに巻き込まれ命を落とすわけにはいかないと
体が既に生存本能として彼女に教えているようである。

一体どれほどの時間が経ったのかわからないが
休憩を挟みつつではあるが
確実に体力がすり減らされていく。

いくら寒さに強いとは言え
長時間、外気に晒されていれば体力も奪われる。
一体何キロ歩いたのか、距離を測る術もあるわけがなく
実は生まれ落ちた場所からそれほど進んでもいないのではないかという
不安にも駆られる。
一向に天気は安定する気配もなく、
容赦ない吹雪がまるで煙のように舞い、視界を奪う。

（まずは集落を探さないと…）
なんにしてもまずは、ゆっくり体を休められる場所の確保。
これが最優先である。
しかし、地図もなにもない状態では
視界の3メートル先からは、もはや白一色であるこの大地で
集落を見つけるなど、

真っ暗な部屋の中で落としたコンタクトレンズを探すようなものである。

まぁ…ほぼ無理に等しい行為であることには変わりはない。

運という能力がないサンタは大抵この辺で

襲われるか体力がなくなり消滅するかのどちらかで

サンタの基礎能力が試される第一の試練のようなものなのである。

辺りを見渡しながら、彼女は休憩を取りながら体力の回復を待っていた。

相変わらずの吹雪だが、時間によっては若干

視界が空ける時があることを学習したようで、その時を待っているようだ。

（ん…あれは…）

突如、彼女の視線の先には

うっすらと赤い点が見えた。

自分が着ている衣服と同じ色の赤。

白と赤と灰色…彼女が生まれ落ちて初めてみた色の中で

最も安心する色である赤の点。

自分の視線の先に何者かがいるという事は瞬時に把握できた。

ついさきほど生まれてから

今までずっと捜し求めていた色である事に間違いはなかった。

会話のドッチボール

迷わず目先の赤い点に向かって走り出した。
目標である赤はいくら視界が悪くても見失うはずもなく
真っ直ぐ視界に捉えられる。
向こうも近づいてくる彼女に気付いたらしく
走るよりも更に早いスピードで近づいてくる。
こういう時、人は「おーい！」などど叫び声を出して
自分の存在をアピールするものだが、彼女はそんな事も知らず
ただ真っ直ぐ走っているだけである。

「……お……い……！」

前方の赤い点の方から始めて聴く音が聞こえた。
吹雪の音ではなく、なぜか安心できる音。
初めて聴いた彼女は少々驚いたが

敵意のような物は感じなかった為、更に走る速度を上げる。

「こんなところに一人でいたら危ないよ…？」

合流し、二人は対話できる距離まで近づいた。

彼女の視線の先には、自分と似たような衣服を纏い

見たことない乗り物に乗り、前方にはやはり見たこともない動物がいた。

自分の姿も把握できていない彼女は、

おそらくはこの前方にいる動物と一緒の形をしているのだろうと理解し始めた。

「あ～…もしかして…生まれたばっかなのかな？？」

一方的に目の前の動物は、自分に向かって音を投げかける。

その意図や、意味を理解できない彼女はどうしたらいいのかわから

ない。

なにしろ初めて聞く音であり、対処の仕方もわからないからだ。

「大丈夫！始めはみんなそうだったから！とりあえずここは危ないから…」

目の前の動物は自分の隣を空け、ポンポンと手をそこに上下させている。

「集落まで連れてってやるから…ここ乗りな？」

大袈裟なジェスチャーを織り交ぜながら、乗り物に乗るように催促する人物。

彼女は首を傾げながら、一体この人物はなにを伝えようとしているかという

真意を探るが…

敵意や悪意が感じられない事から、信用できると確信した。

おそらくは隣に来いと伝えようとしているのだろうかと、彼女は理解し

なんとかその乗り物に乗りこんだ。

「しかし…女のサンタとは…珍しいなぁ～…きっとみんな優しく教えてくれるよ」

一方的に音を発する人物の口元を見ながら

もしかしたら自分も同じような音を発する事ができるのではないかと思い始めた。

自分の足で走るよりも早く

しかも快適な乗り心地な乗り物にも驚きを隠せなかったが

どうすれば自分の感情や、思いを伝えられるか

彼女は頭をフル回転させ、必死に考えているようだ。

風を切る音がうるさく、先ほどまでやはりわからない音を発していた人物だったが

音がかき消されよくわからない。

しかし、彼女は食い入るように口元を見つめながら

その真似をする事から始めているようだ。

「一度覚えたらもう忘れないから…焦る事ないよ！」

彼女の気持ちを察してか、この人物は優しい言葉をかける。

意味もなにも通じてるはずもないとわかってはいるようだが

それでも彼女を励ますようにひたすら一方的に言葉を投げつけている。

前方から突風が吹き荒れ

油断していた彼女の帽子が宙に舞う。

「……あ……」

彼女の口から初めて音が出た瞬間であった。

学ぶとは誠実を胸に刻むこと

「ごめんな…僕はまだ『リスニング』の魔法が使えないから…」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法：リスニング：　相手の思ってる感情や、欲求などを感じ取れる。

　　　　　　言わば読心術のようなもの。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

先ほど吹き飛ばされた帽子はすぐに回収され、彼女に戻された。

疲れた彼女を気遣ってか、この人物が拾って届けてくれたのだった。

孤独から救ってくれた他に

自分の印、唯一自分に与えられた品物を届けてくれたこの人物に対して

彼女はなにか温かい物を感じた。

こういう時、人は一体なんて言うのだろう。

彼女はもじもじしながら、彼が自分にそうしたように
なんとかジェスチャーも交えながらなにかを訴えようとしている。
彼の目を見ながら、帽子を指差し

「……あ……あ……う…」

言葉にはなっていないが必死になにかを訴えている。
そんな彼女の仕草を見て彼はちゃんと、なにを伝えようとしていたのか
なんとなくわかるような気がしたようだ。

「ああ…そういう時はね…『ありがとう』っていうんだよ…」

しっかりと彼の口元を凝視し、形を記憶する彼女。
何度も口をパクパクさせ、なんとか音を発しようと試行錯誤する。

「あ……い……あ……と……」

なんとか出てきた言葉。

しかし、まだ言葉というには粗末で

よく耳を傾けなければ、聞き取れないレベルの音であったが

彼はしっかりと聞いていたらしく

「どういたしまして！」

屈託のない笑顔でそれに応えてくれた。

まだいろんな言葉がわからない。

しかし、彼の笑顔は言葉はわからなくてもなんとなく思いが伝わった。

彼女はそんな笑顔を見て

自分も無意識のうちに笑顔になっていた。

会話とも呼べない代物だが

初めて相手との思いのやりとりが

言葉という音で成立した瞬間であり、彼女にとっては大きな一歩となった。

嬉しいという気持ちと同時にもっと意思の疎通を味わいたい。

もっと知りたいという気持ちが高まっていった。

サンタはそういった感情の昂りや、純粋な嬉しさ、悲しさ、怒りなどで

独自の能力が開花する場合がある。

魔法であることには変わりないが、これも彼らなりの

生きていくための手段、つまり環境適応力とでも言えるのだ。

彼とのやり取りの中、彼女は始めての感情や、感情の昂りを感じ

自分でも知らないうちに一つの魔法を覚えていたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法‥トーク‥　自分の思ってる感情や思いを
　　　　　　　相手の心に直接伝える事ができる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

しかし、魔法の使い方もわからないので

彼女はその魔法を覚えた事すら気付いていない。

だが、彼はすぐに彼女が魔法を覚えた事を察する。

魔法が使えるものは、相手の魔力を感じる力に長ける為

魔力の強さの度合いによって、具現化された光などを感じたり見る
事が可能なのだ。

「なにか…魔法を使えるようだね…魔法の使い方を教えてあげる

よ……」

言葉などの表現などとは違い、魔法はジェスチャーで簡単に伝える事ができる。

集中力がいる為、彼は一度乗り物を止めて彼女に自分の真似をするように

なんとかジェスチャーで教えていく……

少1時間ほど粘った甲斐があって

彼女は自分に宿る魔力を集め、魔法の発動までできるようになった。

まだ彼女の魔力は低く、充分な発動とは呼べないが…

覚えたばかりの魔法：トークを使い

彼の心に直接気持ちを伝える事ができた。

彼の心に直接伝わった言葉は

たった一言『ありがとう』だった。

帰れる場所

彼女は魔法：トークを覚えた事により
現在、乗り物で彼も暮らしているという集落へ向かう最中で
彼は言葉を発し、彼女は心に訴えるという会話を成立させながら
移動している。
彼女もあまり魔法：トークばかりに頼っていては
いつまで経っても言葉の発声法などを覚えないと感じていたので
ところどころ発声法の練習を織り交ぜながら
それなりに気を許せる仲になっていたのだ。

「でも驚いたよ！生まれてすぐに魔法を覚えるなんて…」
（それって…珍しい事なの？）
「うんうん！絶対に君は魔法の資質が高いんだよ！僕が保障する！」
（でも…私もよくわからないよ…これが最初で最後のまほー？に

なるのかもしれないし…）

「あまり悲観的に考えるのはよくないよ…魔法っていうのはきっかけさえあればすぐ覚えるさ！」

「……ひ……か……んて……き？」

「んーなんて説明すればいいのかな…後ろ向きにならないでってことだよ！」

（わかった…がんばるようにするよ）

そうこうしている内に、二人の視界の先には小さな建物群が出現した。

彼が言っていた集落であることには間違いないようだ。

遠めでもポツポツと赤い服をきたサンタが

なにかをしているのがわかる。

「ほら！あそこだよ！まずは長老のところに連れてってあげる！きっと歓迎されるよ！」

真っ直ぐな笑顔を見せる彼は、彼女の肩を叩き

彼女も視界に集落は収めているのだがそれでも

集落の方を指差し、嬉しそうに感情を昂らせている。

サンタは、生まれた場所が集落の中という事自体が珍しく
かなりの確立で人里離れた雪原や、険しい山岳地帯で発生する事が
多い。

数々の説があるが、おそらくは

何年、何百年もの昔、そこで命を落としたサンタの魔力により

再び発生しているのだろうと言うのが定説になっている。

大抵のサンタは故郷はない。

しかし、運よく最初の集落を発見した場合

そこを自分の故郷と決めるサンタが大半である為

実質的にその集落で永住するサンタは多い。

集落に到着した二人は、彼の先導の元この集落の長と呼ばれるサン

タの家へと向かった。

彼が言ったように、長は快く彼女を受け入れてくれ、この集落での生活を許可してくれた。

しかし、この集落でも少々厳しい掟はあるらしく

それに従わない場合は追放される事も覚悟しておけとの事であった。

「生まれたばかりでお疲れじゃろう…今日はゆっくりと休むがいい…確か空き家が…」

「ありがとう…」

「あまり畏まらなくても良い…この集落はもうそなたの故郷じゃ…」

「ふ……る……さ……と……？」

「そなたがいつでも帰ってこれる場所じゃ…」

「ごめんなさい……わからない……」

「ほっほっほっ……今はわからないじゃろうが…そのうちわかる…」

「そのうち……でも…私は…知りたい…」

「あまり一日でなんでも知ろうとするのは毒じゃ……簡単なことから少しづつ覚えていけば良い…」

（言葉を発するのは疲れます…）

「ほっほっほ……言葉も今日覚えたてのようじゃからのぉ…ではもう一つだけ簡単な事を教えよう」

「はい……」

「おかえり、と、ただいま、じゃ…」

（それは2つでは…）

「いいや…この言葉は2つで1つ、どっちか片方だけ覚えても意味がないのじゃ…」

（難しい…）

「いやなに…簡単じゃ…誰かが集落に帰ってきたら『おかえりなさい』と言う…

自分が集落に帰ってきたら『ただいま』と言う…たったそれだけじゃよ…」

（どんな意味の言葉なの？）

「それも…もう少し長く生きたらわかるようになる…とりあえず言葉だけは覚えておきなさい…」

「はい…」

彼女は一日で膨大な情報量を記憶したため

そろそろ精神的にも肉体的にも

限界を感じ始めるほどに疲労が溜まってきていた。

「では改めて歓迎しよう……おかえり…新たなサンタクロースよ…」

「たっ……た……だい……ま…」

彼女はまだ理解する事は出来ないが

奇跡的に生まれた日と同時に

彼女の帰れる場所、つまり故郷が出来た。

この嬉しさはまだわからないだろうが…

これから先数十年も経てばきっと彼女も理解する事になるであろう。

ありがとうって言われたら誰でも嬉しい

翌朝。

彼女はやや騒がしい音で起床した。

前日は、長の話を聞いた後、与えられた家についた後

かなり疲れが溜まっていたらしくすぐに寝てしまったらしい。

空き家ではあるが内装はしっかりと家具が揃えられ

時計や、一日毎に勝手に日付が更新される不思議なカレンダーまで

設置してある。

まるで彼女がこの村に来るのを知っていたかのような

用意周到さであると思わざるを得ない感想だったらしい。

だが、彼女はそんな難しい事を考える間もなく、

家の外の様子が気になり、すぐに身支度をして家の外へ出た。

「お！起きてきた起きてきた！」

「おー！君が新しいサンタかぁ～！」

「おっ…女だぞおい！女！！！」

（おはようございます……）

言葉を発するのはまだ慣れていないらしく

とりあえず目に留まった全員に魔法：トークによる

心への直接的な挨拶をしてみたようだ。

「うぉ！！トークだぜこれ！」

「うそだろぉ……生まれたばっかじゃないのかよ！！」

「おいおいおい…こりゃぁ…すっごい逸材だな…」

自分が唯一使える魔法：トークで挨拶した事により

周囲のサンタは驚きを隠せない表情をしている。

（使うべきじゃなかったんだろうか…）

驚かれる事に対してもそうだが、一度に複数の相手と会話をする事は

彼女にとってはもちろん初めての体験である為

非常に困惑した表情を浮かばせる。

「こらこらこら！！あまり彼女を困らせちゃだめだよ！」

すぐ近くから聴きなれた声が聞こえた。

昨日彼女を拾ってくれた彼が、他のサンタを抑制しに現れたのだ。

「おっ…お……は…よ…う…」

ぎこちないが徐々に聞き取れるレベルにまで

言葉の発声は進歩している。

「おはようー！よく眠れたかな？昨日、長から聞いたと思うけど

さっそく掟通りに…」

（一度に、２つも話題を変えられると…）

「ごっ…ごめんごめん！今からさっそくこの集落の修練所にきて

もらうけど…平気だよね？」

（修練所？）

「サンタとして最低限の魔法を覚える為の場所だよ…掟にもある…」

「き…の…う……村長さ……ん……も……たし……か…に……言って……た…」

「うん！その場所を案内するね！着いてきて！」

「はい…」

「はいはい！みんなも修練所にいこうね～！」

今日も相変わらず、彼は生き生きとした表情で

彼女には爽やかな笑顔を送る。

そんな彼の性格や優しさは、今の彼女にとっては非常にありがたいものであり

唯一、緊張しなくても良い相手だと断言できるのだ。

（ありがとう）

彼女は彼から教わった『ありがとう』という言葉がすごく気に入ったらしく

彼からなにか教わったりするたびに意識して多用するようにしている。

彼も彼女から『ありがとう』と言われるたびに

更に優しく、尚且つ親切で丁寧に事を教えてくれるので

満更でもない様子なのは明らかだ。

修練所は意外とすぐ近くにあった。

彼女に与えられた家から歩いてほんの４～５分の場所にあった。

なかなか大きな建物で

ぱっと見５０～６０人は余裕で収容できるほどの規模である。

先ほど彼がちらっと言った言葉

『サンタとしての最低限の魔法』がすごく気になり始めていた彼女だが

これからいろいろ教えてもらえる事に対してワクワクしている。

「んじゃ…僕は中等教育だから…案内できるのはここまで！」

「ちゅ…う…とー…？」

「生まれたばかりのサンタはまずは初等教育から学ぶんだ！そこで初期魔法や、
いろんな言葉を学べてすぐにトークを使わなくても良いくらいに、会話が上達するよ！」

（それは楽しみだ…私も早く、君と言葉でいろいろ会話したい…）

「そう言ってくれると嬉しいよ！大丈夫！君ならすぐに中等までこれるよ！」

「が…んば……る…！」

「初等修練所はこのドアからず～っとまっすぐ言ったところだから！迷わないと思うよ！」

「あ…りが……とー…」

「頑張って！」

彼との会話もそこそこに、彼女はさっそく初等修練所へと赴いた。

プレゼントってなにそれ美味しいの？

彼女の目の前には、

『初等』と書かれた立て札がかかっているドアが立っている。

躊躇なくドアを開いた。

意外と初等に集まっているサンタが多い事にびっくりした。

ここに集まっているサンタはほとんど自分と同様に

生後1週間も経っていないサンタばかりだ。

なんとなく親近感を持った彼女はとりあえず開いている席へ着席した。

やはりまだ言葉による会話を楽しむというレベルまで

発声法が上達していないサンタが多く

教室はどんよりとした静けさを醸し出している。

しかし、

彼女も魔法は使えるので

高い魔力を秘めている者は何名かみつけることができた。
彼らも同様に自分が魔法を使える事は
すでに確認済みらしく、何回か目線がぶつかる事が多かった。

なにか違和感を覚えた彼女はもう一度あたりを見渡す。
先ほど外で
自分が『女』という性別だという事に対して驚いていたサンタがいた意味が
ここでなんとなく理解できた。
初等にいるサンタは自分以外全員『男』だからだ。
それほど、女のサンタというのは珍しいという事なのだろうかと
彼女は眉を潜め、なにか考えを巡らせるが
考えても自分にはわからない理があるのだろうと言う結論に達し
これ以上難しい事を考えるのは止めようと、考える事はストップした。

目の前には大きな黒板、その近くに教壇があり
まるで学校のような内装を髣髴させる。
しかし、装飾は見事にクリスマスを匂わせるツリーや
リースや電飾が施されている。
なかなかお洒落な教室だな～と彼女は僅かに微笑を見せた。

なんの前触れもなく、一同の目の前に教師らしきサンタが立っていた。
教壇の近くには誰もいなかったはずなのだが、気付かれる間もなく
一瞬にして
そこにずっといたかのように立っている。
明らかにここにいるような若いサンタではなく、ベテランのサンタであると目視でわかる。

「は～い！みなさんも気付いてるかと思いますが～今日も新しいサンタが来ています～」

透き通った聞き取りやすい声で、軽く一同に今日入ったばかりの
彼女の紹介を手早く済ませた。

「よ……ろ……しく……おね……が…しま……す…」

振り絞るようになんとか言葉で挨拶をした彼女。
やはりまだ発声は慣れていないので
非常に聞き取りにくい言葉だったが
それでもなんとか言葉で挨拶を交わした事に一同は賞賛し
惜しみない拍手が送られた。

「はい！では新しいサンタに先生からプレゼントです」

（プレゼント？）

聴き慣れない言葉に彼女は思わずトークで先生に問い返した。

「プレゼントとは…サンタには必須な情報であり一番重要な事柄

です。
相手の気持ちを理解し、相手が今一番なにを欲しているのかを察し
相手を喜ばせる事が出来る贈り物です」
（よくわからないけど…すごく大事なのね…）
「そのとおり！今貴女が一番ほしいものは…まだプレゼントできませんが…」
「この集落で生きていく以上！貴女には呼び名が必要です！先生がプレゼントしてあげます」
「よ……び……な…？」
「心配いりません、初等の授業内だけで使う呼び名ですから…」
（呼び名とはなに？）
「固有名詞を表す言葉で…名前のようなものです…まぁそれは追々説明します…では…」
言葉とトークで会話をしている二人を
不思議そうに見つめる他のサンタ。
なんでこの先生は一人でベラベラと喋っているのだろうと
頭の中がハテナでいっぱいになっているのが大半のようである。

「はい！決まりました！貴女の呼び名は『クリス』です！
皆さん！彼女をこれから『クリス』と呼んでくださいね」

「く……りす…」

不思議となぜか知っているような言葉…

彼女は少し照れながらも

特別な気分に浸り、やや顔を赤く染めていたのだった。

魔法よりなによりまずは会話術

初等では、まず魔法よりも言葉による会話を先に教え
スムーズに会話が成立したら合格。
その後、やっと魔法を教えるとの事。
しかも、初等で教えてもらえる魔法はたった一つ。
だが、サンタにとっては3種の神器とも呼ばれている魔法の一つであるらしい。

黒板に５０音全ての文字が（この世界の言語は日本語）書かれ
一文字づつ発声していく、
それに慣れれば次は、先生が適当に指した文字を発声する。
まるでアナウンサーかなにかの学校のように
教室全体に初等の一同の声が響き渡っていた。

中には早々とその授業をクリアし、会話の練習にまで発展しているサンタもいる。

クリスはどうも『ラ行、ザ行』が苦手であるらしく、どうしてもまだコツが掴めていないようだ。

だが、何度も何度も発声し、先生から的確な発声法を教えてもらうに連れて

集落に着たばかりの時よりも遥かに

言葉を操る術に慣れてきているようだ。

２時間授業、３０分休憩のサイクルで延々と会話術を学ぶ。

授業の中で先生も古代の偉人の言葉や、ためになることわざなども教えてくれるので

会話の質や、言葉の意味も自然と覚えてきているようだ。

「クリスー疲れてない？」

「うん…まだへーきだよ…ロキはどう？」

「僕もまだまだへーきだ！お互い頑張ろうな！」

「うん！そうだ…ね」

などと他のサンタとも少しづつ会話しながら

クリスは確実に言葉を覚えていった。

「言葉にはコミュニケーションを円滑にする他…実は魔法の習得率にも影響があるのです」

「より高度で繊細な魔法を扱うには、詠唱と言う言霊を放つ技術も必要になります」

「えい……しょ？」

「言だ…ま？」

先生が聞きなれない単語を使うと途端に一同はポカーンとしてしまうが

それもそのうちきっとわかるようになると自分自身に言い聞かせ、

早く魔法の習得に移りたいというサンタが大半のようだ。

初等のサンタ数は約２０名。
やはりクリスが一番年齢的には低いが
２０名中１２番目に会話もなんとか合格した。
あとは練習よりも会話を繰り返し、慣れれば問題なく日常会話ができるレベルである。
残りの８名もとりあえずは会話の練習には移っているようなので
他１２名はやっと魔法の授業に入る事が許可されたのだった。

やっとサンタらしい授業が受けれる喜びも感じていたが
クリスは早くこの授業が終わって
自分を拾ってくれた彼とおしゃべりを楽しみたいという気持ちでいっぱいのようだ。

サンタが鈴を鳴らす理由

やっと魔法の授業に移った。

先生も話していたようにこれから習う魔法は

サンタにとっては３種の神器と呼ばれる魔法で

なくてはならない魔法らしい。

一体どんな魔法なのか非常に興味深そうに

クリスは目を輝かせている。

「では…会話のテストが終わった子達は注目～！」

「これからかなり重要な魔法を教えます」

いよいよ先生が動き、１２名に妙な器具を手渡し始めた。

クリスにもそれは渡され、少し揺らしただけで

なんとも耳に優しい金属音が鳴る物であった。

「はい！魔法の説明をします。これから教えるのは『アラーム』と呼ばれる魔法です」

「今手渡した物の音を覚え、魔力を音に変化させる技術が必要ですが…」

「魔力を変化させるという技術は全ての魔法に応用できる基礎のようなものです」

「焦らずゆっくり身につけていきましょう～これから方法を教えます」

先生は鈴を手に持ち、精神を集中させ魔力を徐々に開放させていく。魔力が少ないものでも、先生の魔力のオーラはすぐに感じ取れたようだ。

うっすらと魔力のオーラが見え始めた。

「この鈴の音のイメージが大事です。いきなり音に変化させるのは難しいので」

「まずはこの音の色をイメージします」

先生の魔力のオーラが徐々に色彩を持ち始める。
同時に一同の耳に優しい鈴の音が聞こえ始めてきた。

初めて聴く音ではあるが
なぜか心が落ち着くような、いつまでも聴いていたい感覚に包まれる。
クリスも思わず目を瞑りその音に耳を傾けている。
かなりリラックスした表情で聴き入っているようだ。

「はい！では皆さんやってみましょう！」
鈴の音が止まり、いよいよ練習の時間となった。
まずは渡された鈴の音を覚える事。
これが先決であり、一同は一斉に鈴を鳴らす。
覚えやすいように耳元で鳴らすサンタもいれば
目を瞑り、ゆっくりと音を拾うサンタもいる。

「とか言われてもなぁ～…僕は魔力の使い方もわからないのに…」

「じゃあ私が教えてあげようか？サタン」

「本当かい？頼むよクリス～」

重要なのは何度も何度も練習して

無意識に魔力を集中させる事。

互いに教えあい、魔力を扱う技術を身につけ

共に喜び、達成感を味わう事。

人々に喜びを運ぶという仕事をこなすサンタには

必須とも言える感情である。

どうすれば相手が喜ぶか、相手の喜びも自分も喜びとして

自然に受け入れるのが非常に大事である。

サンタが鈴を鳴らす理由は

人々の期待度を高め、食事の確立を上昇させるためだけではなく

初めてアラームを教わった時の授業を思い出し

初心に戻り、喜びを共感する為という意味も含まれているのかもしれない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法：アラーム：鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、
　食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。
　サンタクロースが最初に教わる魔法。
　応用すれば全ての魔法を習得する事も可能。
　サンタの魔法の基礎とも呼べる魔法である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

才能の片鱗

まだ魔力の使い方がわからない同級生に
片っ端から魔力の使い方を教えていくクリス。
彼から教わった方法は
個人差はあるものの、万人共通してわかりやすく
尚且つ、扱いやすい方法であったらしく
すぐに魔力を開放できる者が増え始めていた。
積極的に教えようとするクリスを見ながら
先生も顔を緩ませ、『うんうん』とご満悦の様子である。

同級生に教えるたび
クリスの潜在的な魔力も飛躍的伸び始める。
喜びを共感するという事は
自分自身の進歩にも繋がると、クリス自身も嬉しそうな顔をしてい

る。
肝心な会話も
まだぎこちなさは残ってはいるものの
徐々に円滑で聞き取りやすいものに変わっている。

満遍なく、魔力の使い方を教えたところで
クリスもやっと魔力変化の練習に移った。
他の８名の同級生も
なんとか会話のテストはクリアしたようで
その８名には先生が自ら魔力の使い方を教授している。

先生が教えてくれたようにまずは鈴の音を覚える。
そしてその音のイメージを膨らませ色を連想させる。
しかし、クリスは生まれたばかりであり
そもそも色事態、それほど数多くは知らない。

見たこともない色を連想するのは不可能なのだ。

「困ったなぁ…」

愚痴もこぼせるほど、会話術は進歩しているが
アラームの習得はかなり難しいらしい。

耳にこびり付くほど鈴の音は聞いた。
何度聴いても色なんてイメージできず
ただ魔力の質が上がっていくだけである。
進展がない事にクリスは少々苛立ちを感じ始めているようだ。
周りを見渡すと
各々が
魔力のオーラに色を加え始めているのがわかる。

ある者は、先生のオーラのように緑
ある者は、太陽の光に似ている色
ある者は、日が暮れ始めたときの色
ある者は、あらゆる光を飲み込めるような暗い色

だいぶ進展しているのがわかる。
クリスはそのいろんな色を見ながら
自分もどれに該当するのかイメージを膨らませる。
彼から教わった通り
精神を集中させ
体の周りに魔力が漂っているようなイメージを沸かせる。

シャン……

僅かになにかが聞こえた気がした。

自分で鈴を鳴らしたわけではないが

その鈴の音は確かにクリスの方から聞こえた。

先生はいち早くその音に気が付いた。

「ま…まさか…」

表情からも窺えるように

かなり動揺している様子である。

先生の表情の変化に同級生も気が付き

練習を一度止める。
先生の視線の先にはクリスが映っている。
一同もなにがあったのかとクリスの方を凝視する。

色のついたオーラは出ていないが
力強い魔力の鼓動を感じる。
まるで脈動するかのように
クリスの周りの魔力が震えているのがわかる。
例えるなら心臓のように、ドクンドクンと脈打っている。

……シャン…

また鈴の音が聞こえた。
今度はすごくハッキリとその鈴の音は耳に残った。

……シャン……シャン……

クリスの魔力の脈動に合わせるように
鈴の音は鳴り響く。
心臓の鼓動と連動しているためか
その音は
心の奥まで響き渡り
なんとも言えぬ安心感と快感を予感させている。

「クリス…できてるよな…？」
「すごっ…」

なにかコツを掴んだのだろうか…

教室にはクリスが放った

魔法：アラームによる鈴の音が響き渡っていた。

初等教育卒業

あっけなく、魔法：アラームを習得してしまったクリスに
先生も含めた一同は驚愕、同時に賞賛の声を浴びせた。
まさか自分でもすぐに音を鳴らせるとは思わなかったクリスも
自分自身にびっくりしている様子だ。

確認するように何度も何度もアラームを発動させてみる。
力強く、優しい鈴の音が鳴る。
しかし、色をイメージしたわけではないので
クリスの魔力のオーラの色に変化は見られない。

「これは…驚きました！まさか鼓動と連動させるとは…
クリスの魔法の才能はすばらしいですね！」
「でも色が…色がわからなくて…」

「大丈夫です！鳴らせられるだけでアラームは充分！すばらしい音色です！」

クリスと少し喋るようになった同級生、サタンとロキも称えるように言葉を投げかける。

「すごいよ…クリス！今日きたばっかでもう卒業じゃないか…」

「もっとクリスに魔力の基礎を教えてもらいたかったけど…」

「え…もう私はここにはいちゃいけないの…？」

アラームを習得したことで

もう自分は初等教育にいちゃいけないのかと

不安に駆られているクリス。

「そんなことはありませんよ！納得いくまで初等にいていいですよ！」

「そう…じゃあまだいるよ…みんなにコツとか教えたい…」

「とりあえず、クリス！初等教育で教える事はもうないので…卒業とします」

「ありがとう」

「おめでとう！クリス」

褒められる、そして称えられる。

なんとも言えぬ感情がクリスに沸き起こる。

こういうときはどんな言葉で返せばいいのだろうか…

なんだか照れくさそうにもじもじしている。

「さっそく僕にも教えてくれよ！」

「頼むよぉ～クリス～」

「うん…」

すかさず、ロキとサタンが教えを乞うように駆け寄る。

クリスは満更でもないように

自分がイメージしたものを伝え、

コツのようなものを教えていく。

全員に教えるつもりなのだろうか…

クリスはその2人以外にもアドバイスしていく。

先生の目には、そのクリスの姿はまったく別のものに見えていた。

（まるでこの子は…聖女…ルチア様そのものだな…）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

※サンタ・ルチア（シラクサのルチア）

実在の人物で、聖ルチアの名で知られるキリスト教の殉教者。

ルーテル教会・聖公会・カトリック教会・正教会で聖人。

目、及び視覚障害者、そしてシラクサの守護聖人。

12月13日に行われるクリスマスの始まりを告げる待誕節

聖ルチア祭が有名である。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

クリスの他にもポツポツとアラームを習得していく者が増えてきた。

しかし、魔法には個人差がある為

いくらコツを教えても

なかなか飲み込まないサンタもいる。

今日の授業が終わる時間まで

クリスはずっとアラームを教え続けた。

結果的に

卒業となったのは５名。

クリス・ロキ・サタン・シモン・ヤコブの５名である。

数時間しか教えることは出来なかったが

他の１５名もそれなりになにかを掴めていたらしく

途中からクリスが教えなくとも、精進に励んでいた。

結果的には２０名中５名の卒業だった事に対して
クリスはやや不満を感じていたが
先生は「充分すぎるほど精進し、その才能はもっと上の教育で生かすべき」と
賞賛してくれ、次からは中等教育にいくように諭された。

授業で名付けられた呼び名だが、
クリス自身、少し気に入った様子だった為
仲の良いロキと一緒に村長の家へ赴き
この呼び名を正式な『名前』として名乗る意思を伝えた。

クリスの他にも、初等教育で名付けられた呼び名を
そのまま『名前』として名乗るサンタは多く
この集落では名前の大半は初等教育で決められた名をそのまま使っているようだ。

クリスは早く、自分を拾ってくれた彼と会話がしたくてたまらず
中等教育の授業が終わるまで
修練所の近くで彼を待つことに決めたのだ。

「クリス…なにをしてるんだい？」

「人を待ってるんだ…」

「人…？知り合いでもいるのかな？」

「うん…私をこの村に運んでくれた大事な人…」

「それは大事な人だね…」

「ロキは真っ直ぐ帰りなよ…もうじき日が暮れる…」

「そうだね…明日から中等だけど…一緒にがんばろうね！また明日！」

ロキとの軽い別れの挨拶も済ませ、クリスは彼がくるまで
習得したばかりのアラームを発動させ

鈴の音を聞きながら

空から舞い降りてくる粉雪を眺めていた。

彼の名はクラウス

厚い雲で覆われてはいるが
徐々に辺りは暗くなり始めた。
もうじき日が暮れ、あたり一帯を漆黒の闇で包まれようとしている
時刻。
修練所からポツポツと教育を終えたサンタが出てくる。
仲のいいサンタ同士でおしゃべりを楽しみながら
出てくるので、おそらくは中等教育以上のサンタであろうと思われる。

クリスは彼が出てくるのをずっと待っていた。
それまでに何度もアラームの練習をしていた為
既にアラームはトーク並みに自在に扱えるレベルまでに達していた。
魔法は使えば使うほど
精度と質が上昇するが

クリスの魔法の資質は異常とも呼べるほど
それ以上に進歩している。
しかし、やはりまだオーラに色を加える事ができず
その事で若干、嬉しさが半減しているようである。

「あ…」

クリスの目の前に、彼が現れた。

「あ！こんなところでなにしてるんだい？」

彼はクリスがずっと待っていた事など知らず、愛想良く声をかけてきた。

「君がくるのを待ってた」

「え…僕を？なんで…」

「初等教育…卒業しちゃって…」

「ええ！もう卒業しちゃ……あれ？言葉が…」

「やっぱりまだ…聞き取り辛いかな…？」

「そんな事ないよ！完璧じゃないか！」

「そう…かな…」

「うんうん！これでトークなしでもおしゃべりできるね！」

「少し疲れるけどね…」

「少しづつ慣れていけばいいんだよ！というか良く聴くと…君の声は美しいな…」

「美しい…？」

「僕ちょっと声フェチな部分があってね…うんうん！ストライクだよ！」

（どういう意味？）

「え？なんでトーク…」

（なんか喋りづらくて…）

「ああ…ごめんごめん！気にしないでね…とりあえずここじゃあ

れだから…」

彼の言うまま、2人は場所を移動し始めた。

クリスは彼と普通におしゃべり出来ている喜びに浸っている。

彼もクリスと言葉で会話が成立した事に満足そうな笑みを浮かべ出会った時以上に喜びを感じているようだ。

「君は…なんて呼び名なの…？」

「ああ…まだ言ってなかったね！僕はクラウスだよ」

「クラウス…か…クラウス…」

クリスは何度も呟き、忘れないように記憶しているようだ。

「君はなんて呼び名をもらったの？」

「クリス…」

「クリスか…良い呼び名だね…うん！似合ってるよ」

「クラウスも似合ってる…」

「そうかな？よく顔と名前が合ってないって言われるけどね！」

「顔…確かに…クラウスじゃないかも…」

「えええ！そこ認めちゃうのか…」

「ふふ…冗談だよ…クラウス…」

「なんだ冗談か…一瞬ほんとに凹むところだったよ…あはは…」

移動しながら冗談も交え、仲良くおしゃべりを楽しんでいるようだ。

クリスはアラームに関して、クラウスに聴きたい事があったようだが

そんな事も忘れて会話に夢中になっている。

クラウスはそんなクリスの心情はわかるはずもなく

純粋に会話を楽しんでいる。

「明日から中等教育だって…」

「自信ないとか？」

「自信なんてあるわけない…でも…楽しみ」

「大丈夫！クリスならすぐ卒業できるさ！」

「クラウスと一緒…？」

「タイミングがちょっと悪かったかも…僕は今日中等は卒業しちゃって…」

「そう…」

「でもさ！上等教育は…すごくハードルが上がるから！そこで一緒になるよきっと！」

「うん…でもクラウスは…私よりも上にいて欲しかったから…」

「それはそれでプレッシャーだなぁ～」

そうこうしているうちに、２人はクリスの家の前まで来ていた。

「明日もまた同じ時間から授業あるから…今日はゆっくり休んで！」

「そうする…クラウスもゆっくり休んでね」

「あはは…言われなくても家に帰ったら、死ぬように寝ちゃうよ」

「クラウス…死なないで…」

「冗談だって！そんな顔しないで…ね？んじゃ！おやすみークリス」

「うん…おやすみ…クラウス」

クラウスは踵を返し、元着た道を戻り始めた。

クリスはクラウスが見えなくなるまで

彼の後ろ姿を見つめていた。

「クラウスか…ふふ…やっぱり…似合ってないかも…」

軽い笑みをこぼしながら

クリスは早々に寝床についた。

悪夢なのか…それとも予知夢なのか…

目が覚めたクリスは目の前の光景に驚愕していた。

昨日は絶対に自分の家で寝たはずなのだが、

今いる場所は見たことない場所だったからだ。

大勢のサンタが集まり、クリスの知らない魔法を発動させている。

見たことない顔ばかり

集落のサンタの顔も碌に覚えていないが

それとは関係なく知らないサンタばかり…

彼らの視線の先には

自分らとは打って変わり、全身黒い衣装を纏った集団。

向こうも魔力のオーラが肉眼で見えるほどに

魔力を開放させ、なにかの魔法を発動させている。

一体、なにが起きているのか…

クリスは必死に考えているが…どうしてこのような場所にいるのかも
まったく見当が付かず、困惑している。

先頭のサンタが雄たけびのような声を上げると同時に
周辺のサンタが一気に、黒い衣装の集団に向かって走り出した。
なにか只ならぬ事態になっていることだけはすぐに理解できた。

向こうも嵐のような雄たけびを上げながらこちらに向かって走り出
してきた。
表情は見えないが…
悪意や殺意のようなものは感じられる。
魔力の質も明らかに人を喜ばせるようなものではなく
ただ『殺してやる』と言いたげに、邪悪な質感を持っている。

「殺される……」

クリスは恐怖を感じ、目線は黒い集団を見ながら思わず後退りしてしまう。

視界の端に見慣れた顔が現れた。

「クラウス…！」

それは昨日やっとおしゃべりを楽しむ事が出来た彼、クラウスその人だ。

目の前のクラウスは

今までクリスに見せた事もない表情で、走り出している。

「待って…クラウス……クラウス！！」

クリスは必死になってクラウスの元へ向かおうとするが

他のサンタが邪魔で思うように前には進めない。

「だめ……死んじゃう…殺されちゃう…！」

明らかに黒い集団の魔力は
まだ魔力が弱いクリスにもその強さの質は理解できる。
クラウスの今の魔力では、全く勝ち目がない事もすぐに理解できた。

黒い集団の先陣が
こちらのサンタに向かってなにかを発動させた。
黒い霧のようで…嫌な質感をもった煙。
瞬時にこれはやばい！と悟ったクリスは息を止める。

案の定、その黒い霧を吸ってしまった他のサンタは
バタバタとその場に倒れていく。
おそらく、致死性の猛毒であるとすぐに判断できた。
黒い霧でほぼ視界を奪われた為

走っていくクラウスの影も見失ってしまった。

（無事なんだろうか…この霧を吸ってしまってないだろうか…）

やはり頭に過ぎるのはクラウスの安否ばかり

しかし、自分にはこの霧をなんとかする力も

前に進む勇気もなく

ただその場で棒立ちになるしかできない…

「うぉぉおおおおお！」

昨日寝る直前まで聞いていた、クラウスの声が聞こえた。

その刹那！

場面が一転し、黒い霧が晴れた。

クリスの目の前には顔見知った2人。

しかし、その2人が着ている服は赤ではなく

全身真っ黒で邪悪な衣装。

表情も、昨日見せた柔らかな表情でなく

明らかに殺意を剥き出しにした凶悪な表情だ。

「ロキ……？サタン……？」

思わずその名前を呟く。

「久しぶりだな…クリス…」

その言葉には昨日までの温もりはなく

思わず耳を塞ぎたくなるような、嫌らしい感じの粘り気が混ざって

いるような声。

「クリス…なんでお前はまだ赤い衣装なんて着てるんだ…」

「早く俺らの仲間になれよ…」

意味がわからない言葉を投げつける2人。

「クリス！逃げろ！！」

真後ろからクラウスの叫び声が聞こえた。

「クラ……」

その名前を最後まで言う間もなく

クリスの目の前にクラウスが現れた。

一体なんでこんな状況になっているのか把握できず

とりあえずあの黒い霧は吸っていなかったのだと

そこだけは理解できたが…

「ロキ…サタン…貴様ら…絶対にゆるさねぇ！」

クラウスは怒りを露にさせ、殺意を持った魔力を開放させている。

「これはこれは…クラウスの旦那じゃないですか…」

「敵陣のエースがこんな場所にいるとは……くくく…」

しっとりした嫌らしい笑みを浮かべながらも

2人の表情には余裕すら感じられる。

「だが…負の心を食った俺らの敵じゃない…」

「サタンの出る幕はないな…俺一人で充分だ…」

ゆっくりとロキが前に出る。

同時にクラウスは構える。

「クリス…僕が合図したら迷わず逃げるんだ…」

どこか懐かしさすら感じる優しい声でクラウスは注意を促す。

「なんで…こんな…」

目の前の状況に混乱しているクリスは

クラウスの言葉も碌に理解できていないようだ。

「いけ！逃げろクリス！」

後ろを振り返る事なく、クラウスはロキに向かって走り出す。

昨日最後に見た後ろ姿とだぶる。

しかし、ロキは既にクラウスの視界から消えている。

「雑魚が…」

ロキはクラウスの真後ろに平然と立っていた。

そして、左手に持っている良く切れそうな剣を振り上げる。

「やっ…やめ…」

鮮血が迸る。

積雪に夥しい量の血の雨が着色されていく。

自分がもっとも安心できる色だと感じていた赤。

しかし、今のクリスの目には

恐怖、憎悪、混乱、あらゆる負の感情が合成された色にしか見えない。

「いや…いやぁ！！！」

その場に崩れ落ちるようにクリスは尻餅をついた。

「弱い者の宿命だ…悲しむ事はない…クリス」

サタンが意味のわからない言葉を投げかけてくる。

「弱者は命を落とし、強者が生き残る…これが道理…お前はどっちだ？クリス…」

はっ…っと目が覚めた。

目の前には木造の屋根が見える。

見慣れてはいないが

ここは村長に与えられた自分の家である事はわかった。

カレンダーは自動で更新され、日付は１１月２１日と表示されている。

「夢…か…」

クリスはホッっと胸を撫で下ろし、朝食代わりにお茶を入れた。

一体今の夢はなんだったのか…

ただの夢であって欲しいと祈るしかなく

クリスは身支度を整え、自宅を後にした。

魔力の高いサンタの夢は予知能力の一種らしい

修練所へ向かう最中、クリスはクラウスと合流した。
クラウスはクリスが見た悪夢など知るわけもなく、
なんら変わらない笑顔を向けてくる。
クリスはやはり先ほど見た夢が心に引っかかり
うまく笑顔を作れないでいる。

「どうしたんだい？今日は元気なさそうだけど…」

「ん…そんな事ないよ…元気」

所詮ただの夢だと自分自身に言い聞かせ、何事もなかったかのように
いつもどおりに接しようとするが
なかなか気持ちを切り替える事ができなかった。

「なにか…よくない事でもあった？」

「大丈夫だよ？」

クラウスはクリスを心配し、気遣っているように今日の会話は少ない。

「ちょっと変な夢見ちゃって…でも夢だから…」

「夢…」

クラウスは途端に深刻そうな顔になる。

クリスはその表情の変化は見逃さなかった。

「クラウス…？」

「外れるといいね…」

「外れる…？」

「魔力が高いサンタの夢ってさ…予知能力の一種なんだ…」

「予知…？」

「これから起こるかもしれない事を夢で見れる能力だよ…」

「え…」

「大丈夫だよ！クリスはまだ魔力が弱いから！きっと外れるって

！」

「それって励ましてる？」

「あ…うん！そうだよ！クリスはこれから魔力を育てるんだからさ！」

「なんか…複雑…でもありがとう」

まだ魔力が弱いと言われるのは少々癪に障ったらしいが

クリスは元気を取り戻したようだ。

「おはよー！クリス～」

「おはようー」

後方から元気なロキとサタンの声が聞こえた。

「あ…おはよ～」

「お！クリス！友達が出来たんだね！おはよ～」

「あー！クリスが昨日言ってた大事な人さんおはよー！」

「ロキ…それは名前ではないと思うぞ…」

軽く自己紹介を済ませ、そのまま４人で修練所まで向かうことになった。

クリスはまだ夢が引っかかっていたが

４人で楽しく会話をしながら歩いていくうちに

こんな明るい２人が黒く染まり、しかも

クラウスを殺すなどありえない！と確信にも似た考えに変わり

やっといつもどおりの明るさを取り戻したようだ。

「中等修練所は２階だから…僕はここで！」

「あ…クラウスさんはこの上なのか…」

「さすが…クリスの大事な人はランクが違うなぁ…」

「もぉ～！結構恥ずかしいから大事な人とか…連呼しないでよロキ！」

クリスはロキの腕を引っ張り、引きずるように中等と書かれたドアを開いた。

サタンも苦笑いをしながら２人の後に続いた。

「大事な人…か…」

クラウスはニヤニヤとしながら3階へ向かっていった。

黒い歴史

中等教育の修練所に付いた3人は
空いてる席に着席した。
中の作りは初等修練所とそう変わらず、黒板や教壇
電飾などの配置もほぼ一緒だった。
昨日一緒に卒業したシモンとヤコブは既に着席し、先生を待っているようだ。
他にも目視で約３０名ほどのサンタが各々の席に座っている。

しかし、初等とは違い
各自仲の良いサンタ同士で雑談をしていて
賑やかな雰囲気である。
やはり、中等でも女はクリス一人だけのようである。
やはり、前触れもなく定刻になると教壇のあたりに先生が立ってい

た。

「は～い！雑談をやめて～！これから授業をしますよ」

初老どころかもう老年に達しようとしている外見の

いかにもサンタと呼べる先生が一同を制した。

「今日は初等から5人の新しいサンタがきましたので、皆さん仲良くしてあげて下さい」

最初はまず自己紹介から始まるのが修練所の流儀らしく

クリス達は手早く挨拶を済ませた。

「ではさっそく始めます。今日もまずは歴史の授業から…」

各々の机の上にはいつのまにか教科書が置いてあった。

しかし、教科書にしては非常に薄く、まるで絵本を思わせるような絵である。

この教材にそって歴史の授業をするようである。

「いいですか…この授業の後にどこまで理解できたのかテストをしますので…

それに合格した人は魔法の授業に移ります。

できなかった人は教科書を暗記するまで読んで下さい」

サンタの歴史を知る事、それもサンタにとっては非常に大事な事であり

先人のサンタの功績を知る事で自身のサンタのあり方も考える事が出来るようだ。

まずは自分が何者なのか知るという点では

歴史の授業は非常に効率の良い手段と言えよう。

ーーーーーーーーーーサンタのお話

昔々、まだサンタがいなかった時代。

北の大地に４名の男女がいました。
彼らは非常に寒さに強く、水と空気だけで何百年も生きていける
変わった種族に属していました。

１人は他の３人を非常に大事に扱い、４人の中ではリーダー的存在で
なにか行動をする際には絶対に、彼の判断が必要不可欠でした。

１人は４人の中では唯一性別が異なり、女でした。
彼女はとても優しく、暴力の類には真っ向から否定するほどに
非暴力主義な人物です。

１人は４人の中でも非常に身体能力に優れ、一番足が速く力持ちで
した。
彼の考え方はどうすればもっと強くなれるのかと
強さを重視する性格です。

１人は力こそないものの、４人の中では断トツに魔力に優れ
様々な奇跡を呼ぶ不思議な魔法を扱えます。

そんな４人でそれはそれは幸せに暮らしていました。
決して争う事はせず、喧嘩もなく、毎日遊んでいたそうです。

そんな彼らの前にある日、１人の神様が現れこう言いました。
「君達はあらゆる種族の中でも非常に完成度の高い種族だ。
そんな君達に１つお願い事があるのだが、きいてくれないだろうか？」

もちろん返事はＯＫでした。
毎日遊んで暮らしていたとはいえ、なにか目的が出来ると言う事は
彼らにとっては最大の喜びだったからです。

神様のお願い事は。

『他の種族を幸せに運んでもらいたい、４人で知恵を出し合って見てはくれないか』

これは難題です。

４人はさっそく知恵を振り絞り、様々な意見を出し合いました。

１人はその種族が望む事を我らが率先して手助けしてあげたらどうか？

１人はきっと我らが望む事こそ全ての種族が望む事であるのではないか？

１人は望む事を叶えるのではなく、その種族を喜ばせてあげる事こそ幸せなのではないか？

１人はその種族に害を与える種族を滅ぼす事こそ、平和に繋がり幸せなのではないか？

４人の意見はバラバラでまるで噛み合いませんでした。

それから何十年も同じ話題でよく考えた結果

４人の中のリーダー的存在の１人が結論を出しました。

「では各々の考えをそれぞれ、まずは実践してみてはどうか？」

その意見に全員が賛成、さっそく４人は行動に移りました…

結果。

２人は聖と呼ばれ

２人は魔と呼ばれるようになりました。

各々の意見の違いから仲が良かった４人で

喧嘩が起こる事もしばしば…

そして…２人は北の大地に残り

2人は南の大地に移りました。

北の大地に残った2人は結果的に

神様が言った願い事を完遂できました。

南の大地に移った2人は結果的に

人々に幸せを運ぶどころか逆の行いをしてしまい

神様に封印されてしまいました。

しかし、北の大地に残った2人は

そんな2人をどうにか許して欲しいと神様に頼みました。

神様は2人に条件を与えます。

『では…今まで通り人々に幸せを運ぶ仕事を続けなさい

1年に一度で結構だが、もしできなかった場合は封印する』

かなり厳しい条件ですが
2人はそれで、封印されてしまった2人を許してもらえるのならばと
条件を飲みました。

それがサンタの始まりとされています。

北に残った2人の名前は
4人の中のリーダー‥　ニコラウス
4人の中で唯一の女‥　ルチア

南に移った2人の名前は
4人の中で一番力が強い男‥　クランプス
4人の中で魔力が一番強い男‥　シャープ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーサ
ンタのお話・完

各々が先生の話を聴きながら、絵本を読み

サンタの歴史を学んでいった。

おそらく、歴史として学んでいるということは

史実に基づいた事実であると各々が理解を深めていった。

頃合を計り、さっそく先生はテストを始めた…

作るのではなく具現化する

先生が問う。

生徒はそれに答えると言った簡単なテストだった。

しっかりと先生の話と絵本を読んでいれば答えられる問いばかりだった。

『君ならどの意見に賛同しますか？』

『もし、クランプスとシャープが復活した場合どうなると思いますか？』

などと、よく考えなければならない問いもあった。

文章を読み、理解し、考えるという

会話術よりもより高度な言語力が試されるので

なかなかクリアできるサンタがいない。

クリスも必死に絵本を読み、内容と自分なりの考えを深めるが

なかなか先生の問いに答える事ができずに悪戦苦闘していた。

数名、おそらくは中等に長くいる生徒が歴史の授業をクリア。

各々、先生に許可されて魔法の特訓に励んでいる。

さすがは先輩といったところである。

何度も何度もテストに挑むが

その都度、問いの内容も変わり

前回の問いの答えを考えてもまるで無駄になる。

すごく高度な授業だとクリスは痛感していた。

ロキ・サタン・ヤコブ・シモンもこのテストにはやはり悪戦苦闘しており

なかなか合格がもらえない。

どうすれば合格がもらえるのだろうか…ではなく

もっとこの絵本についてよく考えなければと思いを巡らせるクリス。

サタンとロキの意見も聞いてみた。

「サタンは…どの意見に賛同する？私は…3番目だけど…」

「そうだね…僕は…一番下だね…平和を望む心は賛同できる…」

「やっぱみんな違うんだね～僕は断然2番目だね！一番優れている種族なんだからさ…」

それぞれの見解で理解している為

1人で考えるよりもなにかが掴めそうな予感がしていた。

もう何度目のテストなのか数えるのも止めてしまったが

クリス・サタン・ロキの3人はなんとか歴史のテストに合格をもらった。

これで全員が合格となり

生徒は全員魔法の授業に移る事になった。

「みなさん！話を止めてください！これから魔法の授業を開始します」

いよいよ、中等教育での魔法の授業。
一体どんな魔法を教えてもらえるのか
クリスは胸を高鳴らせている。

「適材適所という言葉があります。この言葉は人に対して使うものですが…本来は…
例えば、豊富な森林があればその木々を利用し、
建築するといったその場にあった材料を
有効に利用すると言った意味が込められています」

「我々、サンタの世界でもそれは同様ですが、そこで魔法を応用するのがサンタです。
物を1から作っていては…限りある時間を浪費してしまい、チャンスを逃してしまう
……では、どうするか…簡単な事です！具現化すればいい」

「そこで皆さんには魔力を具現化する魔法『エンボディ』を伝授します」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法：エンボディ

する事ができる魔法

具現化する時に

　その場に合わせて必要なものを具現化し、利用

数多くのサンタは移動する為に

動力が付いたソリや、浮遊能力が付いたソリを

この魔法を使う場合が多い。

更に、リスニングとエンボディを応用し

相手の望むプレゼントを具現化させ、

人々に喜びを与える場合にも使用する。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「すごく…便利な魔法…」

「もし…習得したら…移動が楽になるな…」

「これはなにがなんでも習得しなきゃな！」

仲良し3人組は食い入るように先生の魔法の説明を聴いている。

発動方法や、アラームの応用の仕方、コツなどの講義も始まった。

音とは違い、質量を持ったものを形にして存在させるため

アラームやトークよりも膨大な魔力が必要になる。

説明を聴いた限りではとても一日で習得できるレベルの魔法ではない事は理解できた。

「まずは基礎の魔力を高める事が先決です。

皆さんは既にアラームを習得していると思いますので、その魔法を使って

魔力の絶対値を上げていきましょう」

教室中にアラームによる鈴の音が響き始めた。

リンリンリン……

シャンシャンシャン……

ドンヒャララ～……（笑）

人によって鈴の音は異なり、まるでオーケストラのように
聴いているだけで心地の良い旋律を醸し出している。

クリスは既にアラームは必要最低限の魔力で発動できるまでに至っている為
このままでは魔力は上がらない。
全員がアラームを発動している中どうすればいいのかわからないでいた。

（素晴らしい才能ですね…クリスさん…1つアドバイスをしておきます）

先生がトークで話しかけてきた。

（必要以上の魔力でアラームを発動させてみなさい。それで魔力が上昇していきますよ）

（ありがとう…コントロールが難しそうだけど…やってみるよ）

助け舟のようなアドバイスをもらい、やっとクリスもアラームを発動させ

魔力の上昇訓練を開始させた。

模倣して想像して創造する

しばらく魔力を高める訓練を続けている。

各々の魔力の最大値を先生が判断し、

魔法：エンボディを使用可能か判断しているようだ。

サンタの魔力上昇指数は高く、たった数分で今までの倍以上まで伸びる者もいれば

桁単位で著しく伸びる者もいる。

サンタは自然に発生する種族なので

血筋というものは存在しないが、魔力の根本的な部分、

『魔筋』というものは存在する。

サンタの原点となっている４人の先祖。
サンタは発生する場合、必ずとも言っていいほど
この４人のうちの誰かの魔力を元にして生成されるらしいのだ。
それも証明はされていないが
長くその考え方で定着しているのだ。

魔法が得意、または魔法の資質が高いサンタは
ルチアかシャープの魔筋。
魔法は得意ではないが肉体的な強さや、独創性に富んだ発想や、
カリスマ性が高いサンタは
ニコラウスかクランプスの魔筋であると判断されている。
しかし、魔法が苦手といっても
それは同族と比べての話であり
魔法が使える他の種族（人間やエルフ）と比べれば

サンタの持つ魔力は比較にならないほど高いと呼べる。

中等に編入したクリス・サタン・ロキは確実に

魔法が得意な魔筋に当たると思われ

他の生徒と比べても群を抜いて魔力の上昇度が高いようだ。

その伸び方を見て、先生も「末恐ろしい…」とやや恐怖を感じるほどであった。

充分なほど魔力を高めた生徒には

先生からトークで知らせがあり、本格的なエンボディの習得の練習に入る。

既に先輩の何名かはその練習に入っているようだ。

先にサタンにトークが届き、そのまま別の練習になった。

続いてクリスとヤコブ、少し時間をおいてロキが、その次にシモンが続いた。

予めトークでエンボディの練習法は聞かされていたが
生徒が大半、魔力を伸ばしエンボディの使用可能なレベルに達したと先生は判断したらしく
口頭でもう一度、エンボディの練習法の説明を始めた。

「みなさんの魔力はもうエンボディを使用できるほどまでに上昇したと思いますので
もう一度、練習法の説明をします」

先生の言葉に全員が耳を傾ける。

「まずは模倣、今まで見たことがあるものを思い出し、ゆっくりと魔力を開放します。
そして想像、そのイメージを頭の中で定着します。その時に
イメージした物はどんなものなのか…その物の使用法を決めます。
そこからは一気に魔力を開放していきます。

最後に創造、ここでアラームの感覚を思い出し、オーラを変化させます

ここは教室ですので、小さな物がいいでしょう。

このクリスマスリースを具現化してみて下さい」

実際に見たことがあるものしか具現化できない仕様らしいが

それはあくまでエンボディを単発で使う場合である。

これに魔法：リスニングを加えれば、まだ見たことがない物でも

既にリスニングを使った相手はイメージが出来ているため

実際に見たことがない物でも具現化できるのだ。

クリスは、クリスマスリースを凝視し、そして形を完璧に記憶し

魔力をゆっくりと開放していく。

しかし、ここで問題になるのは

あのクリスマスリースは一体、なにをする為の物なのかという疑問である。

その想像が固定できなければ

創造には至らず、エンボディは失敗となる。

（あれは一体なんの目的で飾られているんだろう…）

ここで余計な考えが混ざってしまい、魔力のオーラが途切れてしまった。

他の生徒達もそこで行き詰まっているらしく

エンボディを発動させた生徒はまだいない。

（もしかして…私を拾ったときにクラウスが乗ってた乗り物は

この魔法を使って具現化したものだったのかな…）

少なくてもクラウスはエンボディを使える。

使いこなしているレベルなのかどうかは疑問だが

こんなに難しい授業をクリアした。

そう思うだけで少し誇らしく思えた。

考えが脱線しまくりでクリスは中々リースの使用法が頭に浮かばない。

ちらっとサタンとロキを見た。

なんと2人は既に想像の問題をクリアし、魔力を一気に開放しようとしていた。

「うそっ…」

決して自分より劣っているとは思っていないのだが

2人もここで苦戦しているものだと思っていた為

クリスは驚いた表情を見せた。

「もう少し…もう少しでなにかが出てきそうなんだけど…」

ため息を漏らしながら魔力のオーラを解いたサタン。

「想像が弱いのかなぁ…もうちょっと練って見よう…」

なにかコツのようなものを掴んだらしいロキ。

自分よりも一歩先を進んでいる2人を見て

クリスは「今はエンボディの習得に専念しよう！」と

今の課題に全力で取り組む意気込みを見せた。

（きっとあれは…帽子だ！頭に被る物だ！お洒落を楽しむ物なんだ！）

クリスはリースの用途を想像し、再び魔力を開放し始めた。

イメージってすごく大切

（あれは帽子…頭に被ってお洒落を楽しむ物…）

クリスの魔力が更に加速し上昇していく。

彼女を魔力のオーラが包み込んだ。

次の段階は創造。

アラームの発動の要領で、オーラを物体に変化させる。

（帽子…出てきて…今すごく必要だから…）

想像を固定し、出したい場所に手を翳す。

強い念を込め、開放した魔力を一点に放出する。

「でっ…できた……」

クリスの机の上には
エンボディにより具現化された
サンタ特有の三角帽子が出現していた。

「あ…あれ…？」

クリスは強い光に包まれていた為
教室の全員がクリスに注目していた。
もちろん今クリスがエンボディにより出現させた三角帽子も確認していた。

「クリス…すげぇ…」

「さすがだね…まさに脱帽だよ…」

先生が提示した物ではないが
しっかりとエンボディを習得した証だった。

「クリスさん…素晴らしい…エンボディ習得おめでとう！」

一斉に拍手が送られる。

「いや…それは帽子だろう？先生が言ったのはリースじゃないか！」

1人の生徒が立ち上がり、イチャモンをつけてきた。

「うん…イメージを間違えちゃったみたいで…」

クリスも課題とは違う物を出してしまった為

納得のいかない様子である。

「でも…習得だろうこれは…お前！帽子出せるのかよ！」

ロキがイチャモンをつけてきた生徒に詰め寄る。

「ロキ…やめなよ！リース出すまでは習得だなんて思ってないから…ね？」

クリスがすぐにロキを止め、イチャモンを付けた生徒に本心を話した。

「たまたま帽子が出たからって…いい気になるんじゃねぇぞ…」

ボソッと嫌な言葉を吐き、イチャモンを付けた生徒は元の席へ戻った。

「クリス…気にすることないよ…きっとクリスの魔力に嫉妬してるだけだ…」

サタンが優しくフォローに入るが

最後の一言にクリスはすっかり落ち込んでしまったようだ。

「あの野郎…」

ロキは怒りを露にさせ、一点と睨み付けている。

その表情は

クリスが夢で見たロキの表情とだぶった。

すっかり忘れていた夢だったが

今のロキの表情ですぐにフラッシュバックしてしまったのだ。

「ロキ…怒らないで…私が失敗したのが悪いんだから…さ…」

「でもよぉ…」

「全然気にしてないから！練習を続けよう！次は頑張ってリース出すから…」

「う…うん…」

サタンもゆっくりと頷き、３人は練習を再開した。

しかし、ロキの表情は変わる事はなく

イチャモンをつけてきた生徒を睨み付けていたのだった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6068z/

Battle Santa

2011年12月21日22時49分発行